

2020/08/23

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑫

『信じる者になれ』ヨハネ 4:39-54

■救いを自覚するまでの流れ

「さて、その町のサマリヤ人のうち多くの者が、「あの方は、私がしたこと全部を私に言った」と証言したその女のことばによってイエスを信じた。」(ヨハネ 4:39)

サマリヤの女性はイエス様の言葉によって救いを自覚し、「自分は救われた」と人々に語りました。すると、多くの人がイエス様を信じました。ここに、神が救った人に御言葉を語ることで、その人は救いの決心をすることができるという伝道の流れを見ることができます。伝道とは何を語れば良いのかと迷う人がいるかもしれませんが、基本は「私は救われた」と伝えることです。自分がどのように救われたかという体験を語ればよいのです。聖書のことばを知らなくても、多くの知識を持っていなくても関係ありません。救われた人なら、誰でもできます。信じた人たちは、すでに潜在意識の中で神に応答し、神によって救われていた人たちですから、あなたが救われた証によって自ら御言葉を吸収できるのです。

「そこで、サマリヤ人たちはイエスのところに来たとき、自分たちのところに滞在したださるよう願った。そこでイエスは二日間そこに滞在された。そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」(ヨハネ 4:40-42)

初めは友だちに誘われて教会に通っているうちに、「友だちが言うからではない。自分の信仰でイエス様を信じる」というように、信仰が変わっていきます。誰かの証がきっかけとなり、御言葉によって救いを自覚し、自らの信仰によって「私は信じている」という確信に変わるのです。

■なぜガリラヤで歓迎されたのか

「さて、二日の後、イエスはここを去って、ガリラヤへ行かれた。イエスご自身が、「預言者は自分の故郷では尊ばれない」と証言しておられたからである。そういうわけで、イエスがガリラヤに行かれたとき、ガリラヤ人はイエスを歓迎した。彼らも祭りに行っていたので、イエスが祭りの間にエルサレムでなされたすべてのことを見ていたからである。」(ヨハネ 4:43-45)

「預言者が生まれ故郷では尊ばれない」というのは本当です。幼い頃から知っているので、人間的な見方が先立ち、権威を感じないのです。ところが、イエス様が生まれ故郷のガリラヤに戻ってこられると、予想に反してガリラヤ人はイエス様を歓迎しました。それは、過越の祭りの時にエルサレムに出かけたガリラヤ人が、そこでイエス様が行われた奇跡を見て、大勢の人がイエス様を信じていたからです。

「イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた。」(ヨハネ 2:23)

彼らはしるしを見てイエス様を信じました。しかし、本来、信仰とは見えないものを信じることです。「見えないものを信じることなどできない」と言う人がいますが、見えないものこそ信じなければならないものです。理性においては、根拠のないことや経験のないことは信じるべきではありません。しかし、理性を超えたものは、信仰の世界です。そして、どちらが真実かという、それは信仰の世界です。

神を知るとは、信仰の話であって理性の話ではありません。カントは信仰を守るため、宗教が理性に汚染されないように、理性と信仰を分離させました。イエス様が自らを「つまずきの石」と言われるのは、理性ではイエス様を信じるできないということです。ですから、どうしても信仰が必要になるのです。

多くの人が、あくまでも自分の理性を優先しようとして、見なければ信じないと言い張ります。しかし、この世の知恵で神を知ることにはできません。信じることでしか、神に近づくことはできないのです。

■王室の役人の信仰

「イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水をぶどう酒にされた所である。さて、カペナウムに病気の息子がいる王室の役人がいた。この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところへ行き、下って来て息子をいやして下さるよう願った。息子が死にかかっていたからである。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。」その王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか私の子どもが死なないうちに下って来ててください。」イエスは彼に言われた。「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた。」(ヨハネ 4:46-50)

王室のある役人が、自分の息子をいやしてほしいとイエス様に願い出た時、イエス様は「ガリラヤの人はしるしを見て信じたようだけど、あなたもそうでしょう」と言いました。これに対して役人は、「主よ。どうか私の子どもが死なないうちに下って来ててください。」と

答えています。一見すると会話がかみあっていないように思えますが、この役人の必死さを考えると、「私は信じます！信じますから、とにかく来てください！」ということになるでしょう。この後イエス様が「あなたの息子は直っています」と言った時、彼が素直に信じて帰っていった様子からそう理解することができます。

現在では、自分の感情を伝えるために絵文字を使ったりしますが、説明のない文章で様子を読み取るのはなかなか難しいものです。特に聖書は、時代も国も異なる翻訳なので、字義通り受けとるのではなく、その後の様子なども踏まえながら、読むとわかりやすくなります。

「彼が下って行く途中、そのしもべたちが彼に出会って、彼の息子が直ったことを告げた。そこで子どもがよくなった時刻を彼らに尋ねると、「きのう、第七時に熱がひきました」と言った。それで父親は、イエスが「あなたの息子は直っている」と言われた時刻と同じであることを知った。そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。イエスはユダヤを去ってガリラヤに入られてから、またこのことを第二のしるしとして行われたのである。」(ヨハネ 4:51-54)

王室の役人がイエス様のことばを信じて家に帰る途中、彼のしもべたちと出会い、イエス様が「直った」と言われた時間に彼の息子の熱がひいたことがわかりました。こうして、役人と彼の家族は全員イエス様を信じました。

余談ですが、「熱がひいた」と訳されている「アピエーミ」という言葉は、本来「去らせる、投げ捨てる」という意味で、罪が赦されるとも訳されます。つまり、罪が赦されるとは、熱がひくのと同じように跡形もなく投げ捨てられて完全に白紙になるということです。神様は、私たちの罪について何の記録も残さず、いやしてくださるのです。

■信仰に生きるとは

1. 見ずして信じる者になれ

ガリラヤの人たちはしるしを見て信じましたが、先ほどの役人は結果を見ずにイエス様が言われたことを信じて帰りました。これが、イエス様が私たちに求めている信仰です。

「十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らと一しょにいなかった。それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言った。八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らと一しょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように」と言われた。それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない

者にならないで、信じる者になりなさい。」トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」(ヨハネ 20:24-29)

よく哲学の話をしていただきますが、哲学とはそもそも「物事の始まりは何か」を見つけようとする学問です。それを考えるうちに「存在する」とはどういうことなのかを問うようになり、結局この世の中には何も存在していないという結論に至りました。哲学者にとって、「存在する」とはそこに「あり続ける」ということです。しかし、私たちは変化し続け、昨日の私はどこにもいません。川は流れ続け、今流れている水は次の瞬間ここにはありません。そう考えると、私たちが存在していると考ええるものは、どこにもないということになるのです。神様が、旧約聖書の中で、ご自分のことを「ありて、ある者」「私はある」という者だと言っておられるのは、哲学者にとっては衝撃の言葉です。この世界の中で、神だけが変わらずに存在するものであるという答えを突きつけられているからです。

変化し続ける私たちが本当に存在するものになるには、動かないものにつかまるしかありません。動き続ける川の流れの中でとどまる方法は、動かない岸辺から投げられたロープにつかまることです。イエス様は地上に来て、そのロープになってくださったのです。

神は時間の流れの外におられます。その神の御手につかまり、神の言葉にとどまるとき、初めて人は存在するもの、生きる者になることができるのです。

人は神を信じることで存在するものとなるのです。ヨハネの福音書のテーマは、「信じるものになれ」ということです。それは本当の意味で生きる者になれということ。流されて漂うだけの人生から、動かないものにしがみつこうとすることが「生きる」ということです。それは、神のことばに心を寄せて信じることです。

2. 神が言われたことは必ず成る

信仰とは、神が言われたことは必ず成就すると信じることです。何かことをしようとする時、問題にぶつかったとき、まず祈り、神のことばを求めましょう。

神様は、あなたに語りかけておられます。御言葉を通して、神が進めと言っておられると確信を持てたら、信じて進みましょう。しかし、もしかしたら、神は「やめなさい」あるいは「時期ではない」と言っておられるかもしれません。まずは祈って、神と交わりながら確信を得て進みましょう。神が言われたことは必ず成ります。

3. 信じたなら行動に移せ

役人は、イエス様のことばを信じて、イエス様を連れ帰ろうともせず、ただまっすぐ帰っていきました。これが彼の信仰の行動です。

信仰で大切なことは、行動です。聖書は私たちに信じたとおりの行動をすることをチャレンジします。それは、あなたの信仰を確かなものにし、私たちが本当の意味で生きる者になるためです。神しか生きていないのですから、生きるとは、神に目を向け、神と共に生きるということです。

神を信じる行動とは何でしょうか。主を賛美し喜ぶことも良いのですが、旧約時代から聖書が一貫して私たちにチャレンジしていることがあります。神様は、「あなたが本当に信じるというなら、ぜひこのことにチャレンジしてごらんなさい」と語っておられます。

「十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。——万軍の主は仰せられる——わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」(マラキ 3:10)

今も昔も、世界中の教会で十分の一は神に返すという献金が捧げられています。それは、行動することで信仰が確実なものとなっていくからです。

王室の役人は、見ずして信じ、行動に移し、神の奇跡を体験しました。それが神と共に生きる生活です。神は死んだ生活ではなく、生きる生活をするを私たちに望んでおられます。「神と共に生き、神のことばに平安を得る生活をせよ」と、しるしと不思議を見ないでも信じることをチャレンジしておられます。